

正常圧水頭症

年を取ると、体の不具合が増える。年のせいと片付けたくなるのも分かる。

80歳のM子さん。「ひよっとして認知症では？」と、娘さんに強引に連れてこられた。この頃、ボーっとして、もの忘れが増えたと言っ。確かに、軽い認知障害はある。でも、先に現れたのは歩行障害で、ちよこまかと小刻みに歩くようになった。診ると、左右の足幅が広い。パーキンソン病の歩き方とは違う。

そのうち、夜中に何度もトイレに起きるようになったらしい。Mさんは隠すが、尿失禁もあるようだ。過活動膀胱の症状である。高齢者に歩行障害、認知障害、排尿障害がそろった。ならば、脳外科医はまず「正常圧水頭症」を疑っ。

正常圧水頭症は、70〜80代に多い病気である。原因不明の突発性のものが多いが、脳脊髄液が頭の中に過剰にたまる。頭部MRI（磁気共鳴画像）の写真では、脳脊髄液でいっぱいになった脳室が大きくなり（脳室拡大）。頭蓋骨と脳の隙間が狭くなっていく。

症状は、脳室拡大による前頭葉の障害によるものだろう。治療は簡単。髄液シャント術で、たまった脳脊髄液を他に流してやればよいのだ。大きくなっていった脳室は元の大きさに戻る。短時間の手術で、患者さんの身体の負担も小さい。

うまくいけば、薬では治せない認知障害もなくなるのである。だが、病気の発見が遅れて症状が進行し、神経線維がダメになってしまっただけでは、なかなか難しい。

高齢者にとって、足元がおぼつかないとか、おしっこのトラブル、もの忘れなどといった症状はそっと思っておきたいものだろう。コロナを理由に、受診を先延ばしする気持ちも分かる。

だが、タイミングを失うと治るものも治らなくなるのだ。ここは、嫌いな医者とも仲良くしておいたほうが得である。

（石黒修三「いしへろクリニック・脳神経外科専門医」9/6北國新聞掲載）